人 HITO

自分の機関車で みんなの笑顔を運べるのが とても幸せですね

木田西男さん
（日本小型鉄道クラブ会員）

木田さんとナイジェル・グレスレイの蒸気機関車は、たくさんの子どもを乗せて元気に走ります。運転している時は「後ろに乗っている子どもたちの笑顔が見えなくて残念」なのだそうです。

皆さんは、市内のイベントでかわいい汽車が子どもたちを乗せて走っているのを見たことはありませんか。この蒸気機関車を制作したのが南入曽にお住まいの木田さんです。

木田さんは、子どものころから機械が好きで、特にそのメカニズムの美しさにひかれたのだそうです。小学生の時には古本屋でいろいろな本を読み、割り箸で作ったレールの上で、筆の軸に画用紙を巻いた車輪を使い機関車の走り方やポイントの動きなどを自分の目で見て学びました。中学生の時には、東京の鉄道博物館で田口武二郎さんの運転する木炭焚き蒸気機関車を見て、「社会人になって、給料をもらうようになったら自分で作ろう。」と決心しました。そして昭和25年に初めて機関車を作った時には、まだ工作機械も揃っていなくて、大変苦労したそうです。

SLの制作だけでなく、30年に渡り自分で撮影した西武線や八高線の写真の整理にも、忙しい毎日が続きます。

機関車の魅力を木田さんに伺ってみると「一台作り上げるのに、長い時間と手間がかかるけれど、毎日の作業で少しずつ形になっていくのがいいですね。」と答えてくださいました。世界の機関車を見てきた木田さんが特に好きなのは、色彩が豊かなイギリスの機関車で、最新作はナイジェル・グレスレイの5インチゲージに取り組みました。自分で設計図を描き、真ちゅうや鉄を削り出して一つの部品に仕上げる、気の遠くなるような作業を続けるため、製図から完成まで5年もかかったのだそうです。木田さんは「子どもたちも、欲しい物を自分で作る喜びを知って欲しいですね。」とおっしゃいます。そして「自分が作った機関車に子どもたちが乗って喜んでくれるのを見ると、とても幸せになります。いつまでも頑張っていきたいですね。」と話してくださいました。

これからも福祉バザールや産業祭など、いろいろなイベントで、木田さんと機関車がみんなの夢を乗せて走ってくれることでしょう。

植物・生き物／しょくぶつ・いきもの

さやまの生態系 Vol.49

コムクドリ
（スズメ目ムクドリ科）

全長約19㎝。初夏になるとフィリピン・ボルネオ島などの南方から渡ってくる夏鳥です。雌雄ともに頭はクリーム色で、雄のほおには褐色斑があり、背は光沢のある紫色がかった黒褐色ですが、雌の背は褐色です。足とくちばしは黒色です。本州中部以北で疎林や開けた環境に好んで生息しますが、繁殖期には森林の中に入ることが多いようです。主に樹洞を利用して繁殖しますが、北海道などでは巣箱や建物のすき間もよく利用します。昆虫や果実・木の実などを食べ、樹上で採餌します。市内では、5月ごろ入間川河川敷の林で観察されています。

撮影：県生態系保護協会狭山支部　矢内昭夫さん（水野）